



なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.27 Dec.2011

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「シンポジウム特集号」

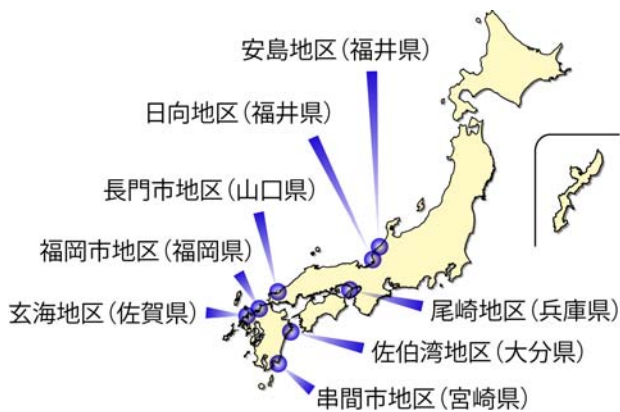
全国のなぎさで保全活動を行う”守人（もりびと）”8名が、12月10日に大阪府の海遊館に集結した。

今月号は、シンポジウム特集号として、8名の”なぎさの守人”から報告された取り組みの様子をお届けしたい。

なぎさの守人シンポジウム in 大阪 開催報告

大阪大会開催

第3回なぎさの守人シンポジウム大阪大会が、12月10日に海遊館で開催された。大阪大会では、なぎさの保全活動を行う8つのグループの代表から、藻場や浅場等の保全活動について、事例発表とディスカッションが行われた。各発表の概要を、以下に紹介したい。



なぎさの守人が保全活動を行う場所

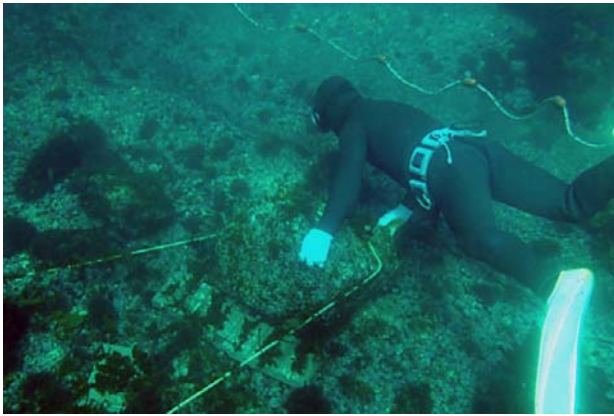


8人の”なぎさの守人”

長門市藻場保全対策協議会の取組

藻場の守人 松村 茂氏 (山口県)

山口県長門市では、10年ほど前から藻場（大型の海藻などが群落となって繁茂している場所）が衰退している。それに伴って、海藻を餌とするアワビやサザエなどの資源が減少している。藻場の衰退要因は、いくつか考えられているが、ウニによる食害が一因になっていることが判っている。そこで、藻場が衰退している場所のウニを除去し、その範囲にアラメという海藻の種苗（海藻の子ども）を植え、その場所にウニハードル（ウニの侵入を防ぐ網）を設置する取組を行っている。また、地域のみみなで「長門の海をまもる」という意識を持ってもらおうと、種をつけたアラメの母藻（ぼそう）の設置を地元幼稚園



写真右上の網がウニハードル

児や小学生と一緒に実施している。現在、ウニ対策を集中的に実施した区域では、藻場の回復の兆しが認められてきている。

佐伯湾地区藻場保全活動組織の取組

藻場の守人 軸丸幸信氏（大分県）

大分県の南部に位置する佐伯湾では、15年ほど前からクロメという海藻が繁茂する藻場が衰退し、海の砂漠化と呼ばれる「磯焼け」が起きている。その原因はさまざま考えられるが、アイゴやブダイなどの魚類やウニによる食害が藻場の再生を妨げる要因となっている。そこで、藻場の恵みを採って暮らす海士（あま（男の潜り漁師））によって藻場保全区域のウニを除去し、そこに種をつけたクロメの母藻を設置する取組を行っている。また、一部の保全区域にはウニフェンス（前述のウニハードルに類似）を設置する取組も行っている。現在、このウニフェンスを設置した区域では、クロメの着生、そして生長が確認さ



種をつけた母藻をネットに入れて海底に設置。この方法は、スポアバック法と呼ばれている。

れている。また、この状況を目の当たりにしたメンバーのやる気が増している。

尾崎地区豊かな海づくり活動組織の取組

浅場の守人 社領 弘氏（兵庫県）

兵庫県の淡路島にある尾崎地区は、昭和40年代までは遠浅で砂の粒が粗い浅場が広がっていた。しかし、近年、河岸や海岸のコンクリート化によって山・川・海のつながりが失われ、陸域からの砂の供給量が減り、その結果、小さい粒がそろった硬く締まった底質へと浅場環境が変化した。また、それに伴って、浅場を利用するアサリやカレイなどの魚介類も激減した。そこで、底質環境を改善



試行錯誤で考案した“桁型耕うん機”

する目的で海底耕うんを実施している。耕うんは、自分たちで考案した桁型耕うん機を船で曳いて海底の砂泥をかき回す方法で行っている。この取組によって、硬く締まった底質が改善されてきており、綺麗で柔らかな砂を好むナメクジウオも確認されるようになった。

安島マリン環境保全プロジェクトの取組

藻場の守人 下影 務氏（福井県）

福井県坂井市にある安島地区は、今でもウニやワカメなどの藻場の恵みを採る海女（あま（女の潜り漁師））漁が盛んに行われている。しかし、現在、その藻場が危機的状況にある。藻場の衰退の原因は、港湾整備で河口に設置された防波堤によって潮の流れが変わり、磯場に砂が堆積、そして海藻の育つ岩や



手作業で砂に埋もれた石や岩を元に戻す”岩おこし”

石が砂に埋もれてしまったことが大きな原因と考えられる。そこで、砂に埋もれた石や岩をめぐって、砂の上にもどす”岩おこし”の活動を行っている。作業は、海女や浅海（せんかい）漁師が海に入って一つ一つ手作業で石や岩をめくるやり方と、場所によってはパワーショベルを使って岩をめくるやり方の二つの方法で行われている。苦労の絶えない取組であるが、今年の10月に岩おこしをした場所に海藻の着生が認められるようになった。また、昨年度は全くいなかった磯ダコが再び生息するようになってきている。

玄海地区藻場保全活動の会の取組

藻場の守人 袈裟丸彰蔵氏（佐賀県）

佐賀県唐津市にある玄海地区には、藻場でアワビやサザエ、ウニを採って暮らす海士がいる。藻場を見続ける海士は、10年ほど前から藻場の衰退を実感している。藻場の衰退は、以前はあまり目にしなかったガンガゼというウニの増加が原因の一つと考えられている。



ガンガゼを除去した区域にアラメが生えてきた！

る。海士にとって藻場の衰退は、死活問題。そこで、藻場が衰退している場所を中心に、ガンガゼを除去する取組を行っている。活動によってガンガゼを多く減少させることができたエリアでは、ホンダワラ類やアラメなどの大型海藻の繁茂が確認でき、藻場の衰退をとめる効果があらわれている。

福岡市ゴミ駆除協議会の取組

浅場の守人 柴田章治氏（福岡県）

福岡県福岡市に面す博多湾の浅場では、ナマコの仲間であるゴミが大量発生している。ゴミの環境への影響は不明であるが、底びき網などの曳網（えいもう）・揚網（ようもう）ができない、漁獲物が傷む・窒息死するなど漁業への被害は深刻化している。ゴミは、初



謎のおおい奇妙な生き物”ゴミ”

め豊前海の沖合域で発生していたが、最近は沿岸域の博多湾の湾口まで分布を広げている。そこで、博多湾の湾口部に大量発生したゴミを小型の桁網を用いて海底から取り除く取組が行われている。小型の桁網は、通常底びき網ではゴミが入りすぎて揚網できないため、ゴミ除去専用の道具として製作した。この取組によって、ゴミの現存量は年々減少し、活動は実を結んでいる。今後もゴミの発生状況を確認しながら、密度管理を行っていく。

日向・海を守る会の取組

藻場の守人 高田良二氏（福井県）

福井県美浜町にある日向（ひるが）地区は、



藻場を再生させるために除去したウニ（写真左）。ウニ除去にあわせて海藻を食べる小型の巻貝も除去されている（写真右）。

家族総出でバフンウニを用いてつくる「塩ウニ」が夏の風物詩となっている。このバフンウニが肥るためには、藻場が必要不可欠。しかし、その藻場が近年減少し、磯焼けが広がっている。磯焼けの原因の一つに、バフンウニ以外のウニによる食害が考えられている。そこで、磯焼け区域におけるウニ除去活動を開始。しかし、活動を行う範囲があまりにも広く効果的な除去が行えないことから、現在は、重点区域を設け、そこに種をつけたホンダワラ類の母藻を設置。その周囲にウニフェンスを張り、フェンス内のウニを徹底除去する取組に切り替え、藻場の再生を図っている。現在、活動区域での海藻の芽生えは確認できていない。藻場再生の取組は、一朝一夕に叶うものではなく、活動の継続がいかに大切かメンバー全員が痛感している。

串間市藻場保全地域協議会の取組

藻場の守人 河野忠重氏（宮崎県）

宮崎県串間市の都井岬にある毛久保（けくぼ）地区には、昭和 50 年代頃までホンダワラ類を主体とする海藻が、船が通れないほど生い茂っていた。また、その藻場には、数多くのトビウオやアオリイカが産卵のために訪れていた。しかし、昭和の終わり頃から藻場が徐々に減少。現在は著しく衰退し、磯焼け区域が広がっている。藻場再生は、地域漁業

にとって念願であることから、平成 13 年から保全活動をスタート。保全活動を進めるうちに、海藻を食べるイスズミなどの魚類やウニが藻場の再生を阻害していることが判明。そこで、現在は、魚類の侵入を防ぐ囲い網を藻場再生区域に張り、更に囲い網の中にウニの侵入を防ぐウニハードルを設置。その中のウニを徹底的に除去し、種をつけたホンダワラ類の母藻を設置する取組を行っている。狭いエリアではあるが、取組を行った場所では、毎年、ホンダワラ類が海面まで生い茂っており、種を周辺の海域に飛ばしている。



囲い網の中の海は、海藻のジャングル！

最後に・・・

シンポジウムの最後に名城大学教授の鈴木輝明氏から全国の守人に向けてエールがおくられた。「皆さんの発表で、漁師しかやれない・漁師だからこそやれる保全活動があることが判った。その一方で、砂の堆積の問題のように、漁師の活動だけでは限界のある広範な問題が存在することが取組を通じて明らかになってきた。海を毎日見つめる漁師さんの環境や生態系に対する感覚は、どんな調査よりも勝っていると、私は思っている。活動を通じて自分たちでは解決できない問題だと感じた時は、是非、国や県、一般の方々に皆さんから直接声を届け、みんなを活動に巻き込んで行って欲しい。これが、今回のシンポジウムを通じて、私が痛感したことです」

（取材・文◎吉永 聡[本誌編集部]）

